

## 3Hの未然防止への適用

SDC 検証審査協会 宮野 正克

### リスクと未然防止

#### 1. リスクとは何か

リスク(危険、危険性)とは、「好ましくない事態の起きる可能性(頻度)と結果の重大性の組合せ」で、点数評価する考え方が一般的である。結果の重大性は、経済的負担や損失で評価するが、復興や挽回が可能な場合もある(図1)。一方、人間の命に関わるリスクの代替策はなく、発生頻度が低くても回避策が必要である。

リスクは内部環境、外部環境の変化により変化していくので、常に見直しが必要である。

いずれにしてもリスクとは当事者の考え方や、専門家の声を反映し総合評価をすることが重要で、この共通認識がリスク回避の具体策と行動に現れてくる(図2)。

#### 2. 未然防止活動のサイクル

図3の未然防止の基本ステップに示す通り、7段階に分割するとわかりやすい。

#### ①未然防止への動機づけ

トップから全従業員までが未然防止の価値を認識して実行することが重要。

#### ②リスクの事前抽出

管理する職域の中で、どのようなリスクが発生する可能性があるか漏れなく抽出する。

#### ③リスクの事前評価

リスクとは結果の重大性とその発生頻度の積の概念である。最悪の結果とは人命喪失である。

#### ④リスク要因除去活動

リスク評価結果に基づき、重要なリスクを取り除くために事前のアクションを行う。

#### ⑤リスク発生想定事前対策

万が一の事故の発生に備えて、「発生時の対策」を事前に策定し、情報共有化を図る。

#### ⑥未然防止の仕組みの改善

経営環境変化により、新たなリスクが生じるため常に仕組みの見直しと改善をする。

#### ⑦安全文化の確立

継続は力なり。仕組みが変化に対応し、風土と

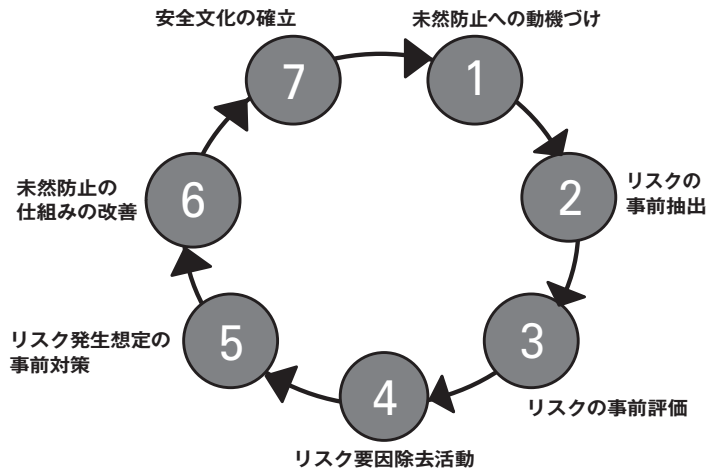
図1 リスクとは



図2 リスク評価のイメージイラスト



図3 未然防止の基本ステップ



して定着させることが重要である。

### 3. 自ら考え行動する活力

リスクに対する人間の行動パターンには一般に下記の4パターンがある。

- ①リスク逃避型
- ②リスク無視型
- ③他人依存型
- ④リスク正面取り組型

④リスク正面取り組型が必須である。リスクを正しく認識し、「自ら考え行動する」に取り組むことにより、自らの責任で合理的な判断をして行動する。これにより活力ある行動が得られる。現実には事故などが発生した場合に、混乱せず適切な行動が取れる。近代化が進めば進むほど、リスクが増大する点も要注意である。

図4 ダントツの品質レベル

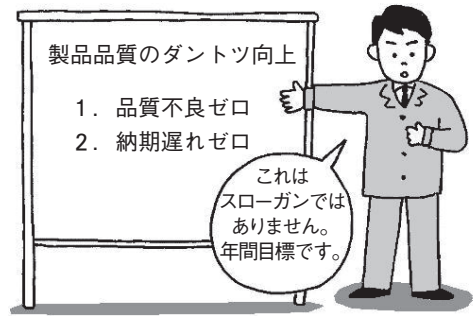


図5 新年方針説明会イメージイラスト



## 3Hでダントツ品質・納期を保証する

### 1. ダントツの品質レベル

顧客納入製品の品質不良はゼロにしよう(図4)。高度経済成長時代の品質レベルの目標は、品質不良ppm1桁以下で通用した。今後、生き抜くためには品質不良はゼロが必須である。

こんなエピソードがある。ある大手電気メーカーが仕入先・取引先の経営者を招待し、新年方針説明会が開催されたときのことである。経営全般に関わる方針が順次説明される中、品質保証部門の責任者が「今年こそはぜひお願いしたいことが

あります。納入製品の品質不良を、昨年実績の半減となる活動を願いたい」との旨の方針説明を述べ、「本社もあらゆる支援をします」と締めた。すると、結びの「何か質問はございませんか」の問いに対して、シーンとして居並ぶ招待者の中から、すっと手を上げて立ち上がった1人の経営者がいた(図5)。